

キリスト／罪の贖いのための供え物

使徒パウロは第1章から第3章前半の部分で、福音を必要とする人間の罪の現実を言葉を尽くして語ってきた。神の前に義人はいない、ひとりもない、ユダヤ人も異邦人もことごとく罪の下にあり、神の前に自らの義を主張することのできる人は一人もない、ユダヤ人が誇りとしてきた律法も人を救わない、救わないどころか、それは人間の罪を暴露し、人間を絶望に陥れるだけである、と(3:9～20)。

こうしてパウロは、律法は人間の罪性をあらわにし、人間は自分の努力によっては決して神の前に義とされないこと、神の側からの救いが絶対に必要であることを人間に自覚させるだけであると語り、いよいよ福音の神髄へと人々を導いていく。彼は言う、

ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者(旧約の全体系)によって立証されて、神の義(罪人を義とする神の義=神の救い)が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません

(3:21～22)

この言葉から始まるパウロのメッセージ(3:23～26)は、まさにローマ書の中心であり、イエス・キリストの福音の神髄と言ってよい。彼がここで述べている要点は次の通りである。すべての人は神の前に罪を犯し、神の栄光の前に立つことができなくなった、しかし、それにも関わらず、今や、価なしに、ただ神の恵みにより、義とされる道が開かれた、これがイエス・キリストを信じる信仰によって与えられる神の義である、即ち、神はこのキリストを私たちの救い主としてお立てになり、彼において私たちの罪を贖ってくださった、イエス・キリストは十字架で死なれた、それは身代わりの贖いの死であった、こうして、十字架のキリストにおいて神は人間の罪を罪として裁かれ、しかも罪人を義として受け入れ救われる道が開かれた、これは驚くべき神の恵みのみ業であった！！

「では、人の誇りはどこにあるのか？」とパウロは問い掛ける(27節)。そして、すかさず「全くない」(口語訳)と答える。これは叫びにも似た答えである。救いは徹底的に神の恵みであり、いかなる意味でも人間の持っている何らかの価値や努力や業績によるものではない、とパウロは強調する。

これはモーセの律法を与えられていること、割礼を身に受けていることを誇りとし、それを持たない者を異邦人として軽蔑していたユダヤ人同胞の誤った律法主義に対する批判の言葉であり、そして、これこそ彼が使徒として生涯をかけ命をかけて主張した福音のメッセージであった。

ただ裁きにしか値しない罪人である人間に注がれたキリストの十字架の犠牲的愛と、それにおいて現された神の恵みの深さを理解するとき、人間はどうして自らを誇ることができるであろうか。一切の誇りは無に帰するのである。神の恵みによって生かされている者は如何なる意味でも自分を誇ってはならないのである。自分の学問や教養、社会的地位や名声、力や業績を誇ってはならないのである。「誇る者は主を誇れ」と書いてある通りである(第1コリント1:31)。